

人間社会学部

# 試験問題冊子

(A日程 2月2日)

## 国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の  内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の  1  14、記述式解答欄の  A  J のみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

みなさんは「自己愛<sup>ア</sup>」ということばにどんな印象を持ちますか？ このことばは意外なほど評判が悪い。「自己愛的な人」というと「自己中のな人」と混同しがちですが、じつはちがいます。自己愛とは自分という存在を温存していこう、サバイバルしているという欲望のことを呼びます。とすればみなさん全員、自己愛を持っていますよね。ある精神分析家は「人間の自己愛は一生涯成長し続ける」と言っています。私はこれを真理だと思う。成長や成熟は大人になつたら終わるのではなく、特に自己愛は一生成熟・成長が続いていくのです。

自己愛を成長させるのは「他者」です。あとで詳しく説明しますから覚えておいてください。自分が親密に感じている「他者」が自己愛に成長のエネルギーを補充してくれる、この成長のメカニズムをよくイメージしてください。イメージを持っていないと自分が成長・成熟する可能性がないといった間違った考えにオチイ<sup>1</sup>ることがあります。とくに中学、高校、大学と進むにつれ若い人はしばしば自己嫌悪や自分には価値がない、そんな自分が嫌いであるという意識に囚われてしまうことがあります。

自己愛には二種類あって、ひとつはプライド、もうひとつは自信です。自分が嫌いという人はしばしば、プライドは高いけど自信がない。精神医学的に、そうした人は非常に困った意識状態にあると言えます。なぜなら、その人は自分が他人から見るとどんな人間か、また自分がいかにだめな人間であるかという苦しい自問自答を延々と続けなければならぬからです。自信とプライドとのギャップはできるだけ縮めておくに越したことはない。

ギャップに苦しむ人には、より高い社会的なポジションに就くことで自信が回復すると思っている人がたいへん多いのですが、これは誤りです。高い社会的地位を達成したとしても、自信がそれに追いつかないという現象がしばしば起こる。なぜか？ 自信の拠り所が承認だからです。ただし、他者からの承認を得るということは、スクールカーストにおいて上位に位置するということではありません。先ほどの「人間の自己愛は一生涯成長し続ける」と言った精神分析家は、思春期・青年期において、大人でも同年代の友達でも彼氏や彼女でもいい、大事な他者との関係が長く続いていくことが一番価値のある承認だという意味のことを言っています。私もまったく同感です。

自信を高めるには、他者との持続的で安定的で良好な関係が重要です。一人や二人でもいい、長持ちする関係を保つことが非常に大きな意味を持ちます。自己愛とは、そうやって鍛<sup>2</sup>えられてゆくものです。

ここまですが現状分析の話です。では、みなさんにこれからどうしてほしいかを少し話したいと思います。

まず、自分が置かれている「状況」を自覚してください。それを認識しないと空気や

カーストというものに流されてしまう可能性があります。よく認識を深め、知恵や趣味で武装することで、不本意な状況に流されるのを防いでください。

それから、面と向かっての対話をたくさんしてください。対話は適切に使うと、人を癒す力や人を成長させる力がある。メールやLINEではなく、面と向かって相手の存在に配慮しながら、言葉を生み出していく作業をしてください。欧米圏では言葉＝現実です。新しい言葉が生まれれば、新しい現実が生まれることと同じことです。私自身もそう思いますし、みなさんにもそう思っています。

また先ほどから自信を持つためには承認を得ることだと話していますが、承認を得るより **a** から始めてください。愛されたければ、まず人を愛せとよく言いますが、同じことです。

それから、みなさんには「演技」をしてほしい。いまやほとんどの教室空間はキャラ空間ですよ。どうせそのキャラを受け入れるのであれば、演じている自覚を持つていただきたいと思っています。別人格を演じている自覚があれば、たとえ少々いじられても、本来の自分自身が無傷で済みます。何度も言うようですが教室空間の空気の支配やカーストなどから押し付けられたキャラは、あまり価値がありません。演技の自覚を持つことができれば、キャラの弊害は最小限に止めることができるので、ぜひ演じていただきたいと思います。

きょうお話しした「空気に逆らいますよ」、「キャラを演じましょう」、「承認や自己愛を大事にしましょう」ということは、突き詰めれば個人主義のことです。無条件で自分を大事にしましょう。「自分にはこのような価値があるから大事だ」ではなく、「自分自身であるからこそ、かけがえのない存在である」という自覚を持つてください。こう考えることができれば、自然に他者も尊重する考えを持つことができます。逆に、ここが揺らぐと、自分には生きる意味がないとか、価値がないといった間違った発想にありと巻き込まれてしまいます。個人主義が根付いていない社会では特にこの発想がモウイをふるう傾向が強い。客観的な価値だけではなく、コミュ力がない＝価値がないという思い込み、さらにプライドと自信のギャップに囚われやすくなりますから気をつけましょう。

個人主義は民主主義の礎でもあります。ひよつとしたら、みなさんは民主主義のことを多数決のことだと思っているかもしれませんが、それはちがいます。多数決はあくまで二次的なもので、民主主義の一番の礎は個人主義なのです。そこでは、個人の自由、個人の権利が、何よりも価値を持ちます。「個人＝俺」ではありませんよ。他者もまた尊重されるべき個人です。個人主義なき民主主義、つまりただの多数決は村人集団です。そんな民主主義に大した価値はないと私は思います。

あと二つだけお話しして今日の講演を終わりにしたいと思います。

フランクという精神科医は、ユダヤ人で、ナチスドイツの強制収容所経験のある人です。彼は「あらゆるものを奪われて、それでも人は生きる価値があるか」という問いに向き合い続けました。フランクの結論は「人間は生きる意味を求めて問いを発するのではなく、人生からの問いに答えなければなりません。そしてその答えはそれぞれの人生からの問いかけに対する具体的な答えでなくてはならない」としています。

たいへん有名なことばですが、つまり、自分から意味を問うのではなくて、もう既に

人生から問いかけられているのだから、それに答えなさいということです。人生という超越的なものに対して、自分で意味を見つける努力をせねばならないのです。

それからもうひとつ、坂口恭平という若いアーティストのことばです。彼はジチヨ<sup>5</sup>の中で「自分のしたいことをしてはいけない」と書いています。おもしろいですね。ふつう大人はしたいことを見つけないとか、自分が進みたい方向に進みなさいと言いたがりますが、彼は絶対そんなことを言いません。じゃあどうするのか。「自分にしかできないことをしてください」。このことばの意味はみなさんそれぞれで考えていただければと思います。

（斎藤環「つながることと認められること」

『学ぶということ（続・中学生からの大学講義）1』より）

問1 傍線部1、4、5のカタカナを漢字に直して、傍線部2、3の漢字のよみをひらがなで、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 A 2 B 3 C 4 D 5 E

問2 傍線部ア「自己愛」に関する筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

1

- ① 自己愛は他者からの承認によってのみ育まれる。
- ② 自己愛の強い人は他者からの評価を気にしやすい。
- ③ 自己愛は大人になるに従って強くなる。
- ④ 自己愛と自己中心的ということは同義ではない。

問3 傍線部イ「自信とプライドとのギャップはできるだけ縮めておくに越したことはない」理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

2

- ① プライドは高いが自信がないと自己否定的になりやすいから。
- ② 自信とプライドとのギャップが大きい人は自己中心的になりやすいから。
- ③ 自信とプライドとのギャップが大きい人は社会的に高い地位に就くことが難しいから。
- ④ 自信はあるがプライドは高くないほうが他者からの承認が得やすいから。

問4 空欄 a に当てはまる文として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

3

- ① 人を愛すること
- ② 承認を期待しないこと
- ③ 人を承認すること
- ④ 対話すること

問5 傍線部ウ「みなさんには『演技』をしてほしい」と筆者が言う理由として最も  
適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

4

- ① 演じているキャラでスクールカーストの自分の位置が決まるから。
- ② 演じているキャラは教室空間だけで通用するものだから。
- ③ キャラを演じていれば自我を傷つけなくて済むから。
- ④ 押し付けられたキャラに価値はないが、自分自身であることには間違いのないから。

問6 傍線部エ「個人⇨俺」という考え方についての説明として最も適当なものを、次  
の①～④の中から一つ選びなさい。

5

- ① 「個人⇨俺」と考えてしまうと、他者を尊重することが難しくなる。
- ② 「個人⇨俺」という考え方は、多数決の原理を二次的なものにしてしまう。
- ③ 「個人⇨俺」という考え方は、個人主義の基礎となる。
- ④ 「個人⇨俺」という考え方は、自分がかげがえのない存在であることを意味する。

問7 傍線部オ「生きる意味」について、本文の内容として最も適当なものを、次の①  
～④の中から一つ選びなさい。

6

- ① すべてのものを奪われた状態でこそ生きる意味がある。
- ② 生きる意味を問うのは無駄なことである。
- ③ 個人主義が根付いていない社会では生きる意味を問うのは難しい。
- ④ 生きる意味は自分が唯一無二の存在であると自覚することから生まれる。

問8 筆者の考えに最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

- ① 人間の自己愛は一生成長し続けるといだが、実際には限界がある。
- ② 大切な他者との関係が安定して続くことが、自信の拠り所につながる。
- ③ 若者に「自分のしたいことをしてはいけない」と言うのは若者のやる気を低下さ  
せるので好ましくない。
- ④ 個人の自由や権利を追求するような民主主義には価値はない。



問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

本書の主張の基本的論点はその表題と副題（『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』）にすでに示唆<sup>17</sup>されている。つまりそれは、現実<sup>18</sup>は社会的に構成されており、知識社会学はこの構成が行なわれる過程を分析しなければならぬ、ということである。こうした主張で鍵をなすのは、〈現実<sup>19</sup>〉と〈知識<sup>20</sup>〉ということばである。これらのことばは日常の会話においてしばしば用いられるだけでなく、その背後に哲学的考察の長い歴史をもっている。われわれはここでこれらのことばの日常的ないしは哲学的な使用がもつ複雑な意味連関の議論に立ち入る必要はない。われわれの目的からすれば、〈現実〉とは、われわれ自身の意志から独立した一つの存在をもつと認められる現象（われわれは〈それらを勝手に抹消<sup>1</sup>してしまう〉ことはできない）に属する一つの特性として、そしてまた〈知識〉とは、現象が現実的なものであり、それらが特殊な性格をそなえたものである、ということの<sup>2</sup>カクシヨウとして、定義しておくだけで十分であろう。これらのことばが一般の人にとっても哲学者にとっても関連をもってくるのは、（単純であるかも知れないが）こうした意味においてである。一般の人は、程度の差こそあれ、彼にとって〈現実的〉な一つの世界のなかに住んでおり、確信の度合はさまざまであれ、この世界がこれこれの性格をそなえたものであることを〈知<sup>3</sup>っている〉。もちろん哲学者であれば、こうした〈現実〉および〈知識〉の究極的資格が何であるかについて問いを立てるであろう。現実的なものとは何なのか？ 人はいかにしてものを知るのか？ こうした問いかけは本来の哲学的考察にとっても最も古い問いかけの一つであると同時に、人間のシサク<sup>3</sup>そのものにとっても古くからの問題である。こうした歴史的重みをもつ知的領域に社会学者が足を踏み入れることが一般の人の注目を引き起こすだけでなく、ともすれば哲学者の憤激をも招くことになりやすいのは、まさしくこうした理由からである。a、論を説き起こすにあたり、われわれがこれらのことばを社会学の文脈で用いることの意味を明確にし、社会学がこうした古くからの哲学的問題に対し解答をもち合わせているということを何ら自慢しようとするものではないということ<sup>4</sup>を、まず最初に断っておくことが重要になる。

もし以下の議論で<sup>4</sup>ゲンミツ<sup>4</sup>なとり扱いが必要な場合には、われわれは上に挙げた二つのことばを用いるときには必ず引用符をつけるであろうが、このことは<sup>5</sup>テイサイ<sup>5</sup>からしても見苦しいであろう。しかしながら、引用符について語っておくことは、これらのことばが<sup>6</sup>社会学的文脈のなかであらわれるときのある特殊な意味合いを理解するうえで、一つの手立てにはなるかも知れない。もし望むならば、〈現実〉および〈知識〉についての社会学的理解は、普通の人間のそれと哲学者のそれとの中間あたりに位置づけられる、といってもさしつかえない。普通の人間というのは通常なんらかの問題でゆきづまりに直面しないかぎり、自分にとって何が〈現実的〉であり、自分が何を〈知<sup>7</sup>っている〉かなどということ<sup>8</sup>で思いわずらったりすることはない。彼は彼の〈現実〉と〈知識〉とを<sup>9</sup>自明のものとして受け取っている。ところが社会学者はこうした態度をとることはできない。というのも、彼は普通の人間はその所属する社会が異なるにしたがって異なる<sup>10</sup>なった〈諸現実〉を自明のものとみなす、という事実<sup>11</sup>に体系的に気づいているからである。社会学者は、他の問題についてはともかく、彼の学問の論理そのものによって、一つの〈現

実〉の間の相違は二つの社会の間のさまざまな相違との関係において理解できるのではないかと問わざるを得なくされているのである。他方、哲学者は職業的に何事をも自明のものとみなさないよう義務づけられており、普通の人間が〈現実〉であり、〈知識〉であると信じているものの究極的な資格が何であるかを最大限明らかにするという課題を負わされている。いいかえれば、哲学者は引用符はどこにつけるのが正しく、どの場合には省略してもかまわないか、を決定すべく、つまり世界についての正しい主張と正しくない主張とを区別すべく、仕向けられているのである。このことは社会学者にはおそらく手に負えない仕事である。テイサイ<sup>5</sup>からでなくて論理的に、彼は引用符に執着するのである。

たとえば普通の人間は自分が〈意志の自由〉をもっており、したがって彼の行為に対して〈責任がある〉と確信しながら、同時に子どもや狂人に対してはこうした〈自由〉や〈責任能力〉を否認するということがある。一方、哲学者は、どのような方法によってであれ、こうした〈自由〉や〈責任性〉といったことばの存在論および認識論上の資格が何であるか、を追求しようとするであろう。b、人間は自由なのか？責任とは何なのか？責任の限界はどこに存在するのか？これらの事柄を人はいかにして知りうるのか？等々といった具合である。これらの問題に対して社会学者が回答を与えられないことはいままでもない。しかしながら、社会学者が問うことができ、また問わねばならない問題というのがある。それは、いかにして〈自由〉という概念が他の社会においてではなく、ある一つの社会で自明視されるに至ったのか、いかにしてその〈現実〉がある社会において維持されているのか、そしてさらに興味深いのは、いかにしてこの〈現実〉が個人あるいは集団全体に再び失われるということがありうるのか、等々といった問題である。

このように、〈現実〉および〈知識〉に関する問題への社会学的関心は、まず最初それらの社会的相対性という事実によって正当化されるのである。チベットの僧侶にとつて〈現実的〉であるものは、アメリカの実業家にとっては〈現実的〉でないかも知れない。犯罪者がもつ〈知識〉は犯罪学者がもつ〈知識〉とは異なっている。そこで次のように言うことができる。すなわち、〈現実〉と〈知識〉の特定の集合体は、特定の社会的文脈と関係をもっており、これらの関係は、こうした文脈の適切な社会学的分析の対象に含まれなければならないだろう、ということである。このように、〈知識社会学〉の必要性は、そこでは何が〈知識〉として自明視されているか、という点からみたまざまな社会の間の観察可能な相違にすでに与えられているのである。しかしながらそれだけでなく、自ら知識社会学と名のる学問は、さらに人間社会において〈現実〉が〈既知のもの〉として受け容れられるときの一般的な様式をも研究対象とする必要があるであろう。換言すれば、〈知識社会学〉は人間社会における〈知識〉の経験的な多様性を研究対象としなければならないだけでなく、いかなる〈知識〉体系であれ、それが〈現実〉として社会的に確立されるに至る過程をも問題にしなければならない、ということである。

それゆえ、われわれの主張は次のようになる。すなわち、知識社会学はそうした〈知識〉の究極的な妥当性、ないしは非妥当性（それがいかなる規準によるにせよ）とは関係なく、なんであれ社会において〈知識〉として通用するものはすべてこれを対象にし

なければならぬ、ということである。さらにまた、人間の〈知識〉が社会状況のなかで発達し、伝達され、維持されていくかぎりにおいて、知識社会学はこれらのことが行なわれる過程を、自明視された〈現実〉がどのようにして普通の人間にとつて凝結していくのか、という観点から、理解すべく努めなければならない。換言すれば、知識社会学は現実の社会的構成の分析を問題にする、というのがわれわれの主張である。

(P・L・バーガー、T・ルックマン 山口節郎訳)

『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』

問1 傍線部1の漢字のよみをひらがなで、傍線部2、3、4、5のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1  2  3  4  5

問2 傍線部ア「示唆」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 政策・対策を立てて、それを実地に行うこと
- ② 心に思うことや感ずることを、色・音・言語などで表すこと
- ③ ある語・語句の持つ表面的な意味以外の、情緒的な意味や細かな意味
- ④ それとなく教えたり、暗にほめかすこと

問3 傍線部イ「〈現実〉と〈知識〉」についての説明として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 〈現実〉と〈知識〉ということばは哲学的考察の長い歴史を持つ。
- ② 〈現実〉は、われわれの意志から独立して存在する。
- ③ 〈現実〉についての〈知識〉は哲学者の考察の中にもみ存在する。
- ④ 社会学者は、一般の人とも哲学者とも異なる態度で〈現実〉と〈知識〉にアプローチする。

問4 空欄  に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① つまり
- ② たとえば
- ③ それゆえ
- ④ ところが



問5 傍線部ウ「自明のものとして受け取っている」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 11

- ① 何ら説明を必要としないわかりきったこととしてとらえている。
- ② 偽りのない真実であると信じている。
- ③ 自ら説明できることであると考えている。
- ④ 証明することが必要な事実であると受け取っている。

問6 空欄 b に当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 12

- ① まず最初に
- ② たとえば
- ③ その上さらに
- ④ そしてまた

問7 傍線部エ「社会学者が問うことができ、また問わねばならない問題」とは、たとえばどのような問題か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 13

- ① 人間は自由なのか、責任とは何なのか、といった問題
- ② 〈現実〉と〈知識〉ということばを用いるときには引用符をつけるべきかどうかという問題
- ③ 〈現実〉がなぜ失われるのかという問題
- ④ 〈自由〉という概念が、ある一つの社会で自明視されるに至った問題

問8 筆者の主張として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 14

- ① 知識社会学は、ことばの存在論および認識論上の資格が何であるかを追求しようとする学問である。
- ② 知識社会学は、哲学的問題に対して別の視点から解答をもたらそうとする学問である。
- ③ 知識社会学は、社会において、人間が〈現実〉であり、〈知識〉であるとして信じているものの究極的な資格が何であるかを問題にする学問である。
- ④ 知識社会学は、〈知識〉や〈現実〉が人間社会においてどのように構成されているかを問題にする学問である。

(以上)





